

言語における自然と人工: 普遍言語・国際共通語・正書法

土屋俊(Syun Tutiya)
(大学評価・学位授与機構)

2011年7月16日 Okano Atunobuを偲ぶ会

若干の背景

- 1952年生まれ
- 高校(都下の私立)でエスペラント運動(“El Popola Cinio”講読)⇒大学でもちょっと
- 1972年、故碧海尚雄のお誘いでMBKへ
⇒Okanoさん、くろしおさん⇒『技藝は難く』世代別解説を担当⇒『三上章著作集』総索引作成参加
- 結局、科学史・科学哲学⇒認知科学⇒雑

もしローマ字化政策が実現していたら？

- 教育使節団報告書の漢字廃止論、「国語」改革の目的は、
 - 日本の民主化
 - (知的)労働力の迅速な育成
- では、ローマ字化できなかったから、現代の日本は民主的でなく、経済的に貧しいといえるか？ ⇒ いや、いえない。かなり民主的だし、十分に豊か
- しかし、ローマ字化しなかったからではないだろう

今回のテーマに至る不思議な縁

- エスペラント運動とローマ字運動の間不思議な縁
 - 大戦間期の国際労働運動 ⇒ Sennaticia Asocio Tutumonda(SAT, 1921-) (アナキズムとの関係、大杉栄)
 - 第三インター(Comintern, 1919-43)の関係
 - 日本では関西エスペラント同盟(KLEG、川崎直一)
- ローマ字運動との接点
 - 大本教
 - 斎藤秀一
- 日本の労働運動 と戦後の民主化、そしていわゆる「左翼」「リベラル」
- 日本における「普遍」志向と「西洋」「欧化」志向との関係

素朴な疑問

- 言葉は人間が「作った」ものなのに、なぜ自然言語と呼ばれるのか? ⇒ ふたつの対立軸
 - 自然言語 ⇔ 形式言語
 - 自然言語 ⇔ 人工言語
- 言語が「自然」であるということなのか?
- いや、言葉は人工的でしかあり得ないのでは?
- ましてや、書記法(writing system)はますますそうでは?
- 他方で、文書の自律性(SGML⇒XML)
- では、書記法の選択とは何なのか?
- そして、そもそも、言語における「自然」とは何なのか

ピュシクとノモス

- プラトン『クラテュロス』
 - 自然な名前?決めただけ?
 - 自然である⇒必然的?
 - 人為である⇒恣意的?
- この時代の音と文字の関係は面倒
- (漢字では、この議論はちょっとできない)
- しかし、言語そのものの位置付けの議論としては重要
- 現代的には、「ノモス」説のようだが、普通の言語は「自然」言語ということになっている

近代における人工と自然

- 国民国家と近代語
- 普遍言語：
 - 知識の完全な表現 ⇒ *characterica universalis* (Leibniz)。背景には記憶術、占星術
 - 共通言語 ⇒ 人工言語(ザメンホフ)
しかし、“*lingua franca*”は*de facto*には常にある。
そしてPidgin ⇒ 共通言語
- 書記言語の「普遍性」
 - (かつての)ラテン語と(現代中国大陸における)漢字
 - シンボリズム・占星術・化学記号・数学・論理学

書記言語・正書法の政治性

- そもそも正書法(orthography)の「正」(orthos)とは?
- 歴史的にみても、書記システム(writing system)の選択に合理的根拠なし
 - たとえば、ウイグル: 突厥文字、モンゴル文字、キリル文字、西夏文字、漢字、アラビア文字
- 話し言葉の方言はいずれにせよ残る
- したがって、「正書法」改革は、人為を変革するという意味の政治的行為でしかあり得ない
 - ローマ字化改革は、戦後民主化という千載一遇のチャンス逃がしただけ
 - 話し言葉の研究は、「自然」科学? その研究対象は人が作り出したものではないのか?